

中)に急報し、葬儀万般の執行を依頼する。隣組では、取敢えず言い継ぎ(フレ)で講中に急報する。

2. 講中各戸から各男女一名づつ喪家に参集し、お悔みを申上げ、葬儀委員長を選任し(多くの場合公民館長がこの任に当たる)会計担当を定め、葬執行に關し協議を行い、仕事の分担を決め執行する。

3. 分担

◎葬儀関係の仕事は二人組で分担する。

イ 近親縁者への通知は夜間といえども近隣町村まで直接急行して確実に伝達していたが、近年電話が普及開設されるに至り電話通報によることが多く、電報も用いられている。二人組分担は安全確実のため、不慮の事故までおもんばかったの対処であった。

ロ 町村役場に連絡し埋葬(火葬)許可書をもろう。これには主治医の死亡診断書が必要であり、火葬場の都合も確かめ、依頼するものとした。

ハ 関係の神官、お寺に連絡し、葬儀の告別、出棺等日程を打合せるものとした。

※神道では土産神に帰幽報告の儀が行われ、お寺では早速喪家に行つて枕経をあげるのが通例である。

二 喪家によつては新聞による広報を行うこともある。

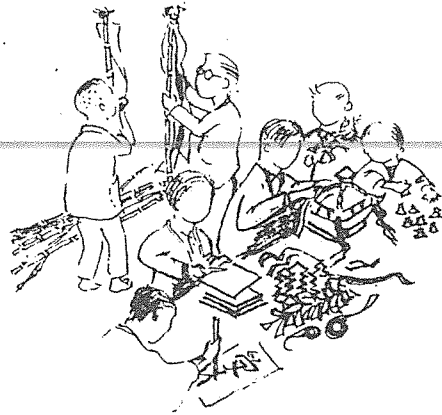
ホ 下持田の「五合悔講(家床・勝利・持田・真米・高河原・正祐寺)の公民館責任者に通報する。

◎五合悔講は旧藩政時代からの相互扶助の葬儀講である。農民の生計は苦しかったので、葬儀の炊き出しをはじめ諸出費負担は苦しかったが各農家から白米五合宛を持ち寄り扶け合つたもので隣保班内は一升悔であつたから全部では約二俵程の白米が集り、葬儀急々の時大変有難いことであつた。近年職業も多様化し、生活は豊かになり、白米も自由に入手できるようになっているが、旧来の美風として存続している。

三、各係分担

1. 葬具準備(主に男役)

イ 棺桶、靈屋、墓標、位牌、香箱、八足机、ローソク立等、大正年代、昭和初期までは、各地域に



るようになり、段々と華美になった。

大工職や器用な人が居たし、物持ちの家では原材料を用意していて、葬儀当日立派に作成することも多かったが、戦時中町葬諸般な事情から葬具屋に用意されているものを買入れ

口 松明、提灯、天蓋、五色旗、弔旗、銘旗、錢籠、担ぎ棒、荷縄、竹杓、しめ縄草履、杖、被布、生花、花輪等まで葬儀屋から買入れられるようになって男役は竹箸作りや小物に手を入れる位になり、半紙、五色紙、麻緒、筆墨液、ローソク、線香、釘等と共に買入れている。

ハ 故人の遺影写真引き延ばし額に入れも町葬以後は普通に行われている。

ニ 会葬者控席、受付係席等テント設営駐車場設営、

2.

案内板設立等以前は考えられなかったことである。
ホ いけ堀り係、土葬の場合は講中の若者数名がこの任に当てられ、約一・五米（約五尺余）の穴を掘った。この仕事には妊婦のいる夫はあてない。埋葬の際土盛り土寄せを手伝い、土まんじゅうの上に墓標をたて、霊屋や祭具を供えるのが普通であつたが近年火葬が行われ、納骨塔式墓になつてからは遺族がお骨拾いを行い、忌明けの後納骨するので講中は墓地の清掃をして奉仕する位である。いけ堀り係には終了後『道具ゆすぎ』といって焼酎、肴が提供されるし、使用した道具は焼酎、塩水で清めてからでないと他の用に使われないものとされている。

炊き出し係接待係

（主に女の役）

炊き出し用の大釜

・大鍋を公民館で用意し、食器や膳まで備えている公



民館が多い。

各係分担をきめて、出たての膳から来客の茶菓子の接待、村人の食事の世話まで一切を引き受けるので大仕事である。

野菜類の無い家は皆で持ち寄り、薪等持ち寄っている。

大正時代から昭和初期までは豆腐、油揚げ等は講中で作っていたが、近年では調味料等と併せ購入している。

四、湯灌と納棺

死者は納棺の前に全身をきれいに洗い浄め、一生涯の穢^{けがれ}を払い落して極楽への旅立ちの支度をするのであるが、湯灌は血縁者で最も近い者がつとめる慣行であり、女性がこれにあたるのが通例である。普段着で縄帯、縄襷をしめ、洗濯だらいか洗い桶を用い、新しい竹柄杓^{たけびしやく}を用い、先ず敷水を入れ、塩を入れ湯を入れて行う（湯灌の時は湯に水を入れるのではない）神道では焼酎を遺体に吹きかけてから始め、仏教では線香をたくさん焚いて清めてから始める。ひげをそり、

髪を整え、爪を切って、女性には化粧をして唇に紅をさしてあげる。着衣はさっぱりとした清浄なもの、新調白木綿の下着とし、生前好きであった着物を左前（右胸）に着せ、帯は胸元で結び、白足袋をはかせ、胸のところで合掌させ数珠をかけてやり首には六文銭を入れたズダ袋をかけさせてやった。三途の川の渡し賃とのこと、納棺に当たって親戚の者が爪や髪を切って入れてやることもある。納棺は北枕になるように寝かせ、生前の愛用の品等入れてやる。友引の日には人形を入れてやる。最近では祭壇の花をちぎって遺体を飾ってやり、お別れ最後の盃を一杯づつ口にくくませてやる家もある。暑い気候の時納棺のままの時間が長くなる時は氷を入れてやることもあが、現今ではドライアイスを入れることもある。

棺の蓋をしめるのには釘を打ちこむのに一人では一回づつしか打たぬものという。納棺を終ると神道では白布で包むが、仏教では飾り布をかぶせる。

五、祭壇

納棺を終ると遺族・親戚一同棺の廻りを飾りたて、灯明や香をたいていたが、戦時中の町、村の影響を受け、遺影写真をかこんで神仏両式で豪華に飾り立てるようになったが、葬儀社の競争になっている。

六、通夜（通伽）

遺体の側に喪主及び親族一同正装して付き添い、知人、一般のお悔み参拝を受け、喪家からは湯茶、焼酎等の接待振舞が行われ、深夜十二時頃に及ぶことがある。猫は魔物だ、遺体の上を越えさせてはならぬと注意を払い、遺体を守るため、刃物を置くならわしがある。

深夜からは遺体の見守りをかねて、最も身近の者が添い寝する。

七、出立ての膳

喪主、遺族、親族一同告別の前にお別れ最後の膳につくのであって、仏教では生臭物を排した精進料理で

あるが、神道では普通料理である。膳部は白飯一ぜん、汁物、豆腐、肴、酢の物、煮豆、ひら（油揚げ、コンニャク、椎茸、人参、里芋、昆布等の煮付）、盃とし左膳、落し箸が普通。

八、告別式

神式、仏式により式次第を異にする。

○仏式Ⅱ一同合掌礼拝、臨終勤行（ここで白骨御文章の読経を行う）、納棺勤行、通夜勤行、出棺勤行（ここで焼香を行い、弔辞弔電披露を行う）、火屋勤行、納骨勤行、終骨勤行、還骨勤行。（忌明に当たっては忌明勤行が行われる。）

○神式Ⅱ一同拝礼、修祓、献饌、祭主祝詞、弔辞、弔電披露、玉串奉奠、一同拝礼始終奏楽のうちに進められる。

九、出棺、火葬、埋葬

告別の儀式が終ると出棺であるが、遺体納棺でまだ蓋が釘どめしてない場合は遺族親族一同別れの盃を口

元に傾け、飾り花をちぎって遺体を飾り、蓋に釘を打ちこんでしめる

(一人一打ち)

親戚の者が棺を玄関まで抱え持つか担ぎ竿(棒)で運び出すと、隣組の若者衆が引継ぎ



葬列の発進となるが、地域の慣行で庭先で左廻りに三回廻って出発する所もある。葬列の順序は、松明、提灯、五色旗、弔旗、飾籠、花輪、生花、神官或は僧侶、銘旗位牌、遺影写真、靈棺(天蓋は棺の上)納骨箱、墓標(土葬の場合)喪主、遺族、親族、一般会葬者、死者が高齢者の場合は飾籠に小錢包を沢山に花吹雪にまぜて用意し葬列進行途中で振撒くのを通例とした。火葬の場合は出迎えの靈柩車に靈棺を納め、適当な場所ので遺族、親族を代表する者が会葬者や葬儀講の皆様

にお礼の挨拶をのべ、喪主は位牌、写真と共に靈柩車に付き添って乗車し、遺族、親族は同伴の車に分乗して火葬場に向かい、会葬者は解散する。以前土葬が多かった頃は、葬列は墓地まで随行し、お礼挨拶は墓地で行われるのが普通であった。

墓地に棺安置台がある所ではそこに安置し読経の後埋葬するが、無い所では埋穴の上に安置して読経の後穴に納め、お別れの拝礼を行い、穴掘係の者が土を盛り上げ、墓標を立て靈屋をのせ灯明や線香をあげ、生花、花輪五色旗等で飾りたてた。

以前は町営火葬場が牛牧にあった。焼き上り時間がかかったので骨拾いは翌日になり、火葬場の人が骨を拾って骨壺に納めていくれることもあった。

現在の火葬場では遺族一同の礼拝が終ると直ちに入炉点火となる。電気炉だから約一時間半で焼き上がるので、遺族代表がすぐお骨拾いをして、遅くとも夕刻までには白布に包まれた遺骨が靈棚か仏壇に帰ってくる。灯明や線香をあげて後日納骨祭りをを行うことになる。

十、忌明

神道と仏教では種々慣行を異にしていたが、神式では五十日、仏式では四十九日で忌明としていたものであるが、近年では①親族一同が遠隔の地で働いたり、学業についているため、忌明に参集するのが容易でない。②近い所で居住していても農作業その他の職業でも忌明当日は都合の悪い事情がある。③忌の明かぬうちに仕事をすると怪我が起り易い。④忌のあかぬうちは種まきや苗もらいまで不幸なことがつきまとうと云われている。等の事情から、忌明を早くしてほしいとの要望が大きく、葬式の終ったその日に忌明祭りをすることが喜ばれるようになった。

喪家としても同じことだが、その上葬儀講中の皆様に大変お世話になったお礼もしなくてはならないし、忌明宴を開くのに必要な諸道具は集まっているし、加勢の人も多く、料理も仕出屋が如何ようにでも即日引き請けてくれるのだから、葬式当日、日を改めずに忌明祭をすることが最も好都合というので、そうすることが慣行となっている。

十一、お悔金、花輪、生花とお返し

1. 五合悔講

このことは二、連絡通報に詳しく述べた。

2. お悔金、花輪・生花

悔金について特に規定はない。近年段々と多額を包むようになってきている。酒、焼酎等の贈物も多額になり、花輪や生花も多くなっている。公民館活動の一環として自粛をよびかけて、一時減少の傾向にあったが、又多額になっている。

お悔のお返しも葬具店の働きかけで段々と華美になっている。町の社会福祉協議会等に金一封を贈ることでこれにかえることが行われているのは悦ばしいことだ。

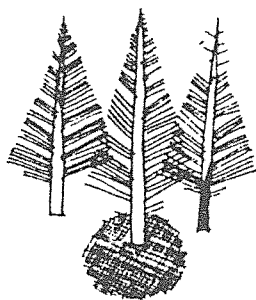
3. 葬儀の翌日喪主等代表二人で葬儀講関係各戸にお礼廻りしている事と忌明の膳にお招きして親戚同様の御馳走していることも通例よろこばしいことである。

十二、忌み嫌い

1・葬具の縄は左ないとする

- 2・死者の着衣は左胸とする。
- 3・死人は北枕に寝かせる。
- 4・猫が死体を越えたと成仏しない。
- 5・納棺の時近親者は爪やかみ切って入れる。
- 6・棺の蓋を打ちつける。釘は一人一打ち。
- 7・葬式の往復は同じ道を通らぬ。
- 8・葬式から帰ったら塩と水で手を清めよ。
- 9・出たての膳は一ぜん飯とする。
- 10・出棺後に死亡愛用の茶わんを投げ割る。
- 11・出棺直後座敷を掃き出す。
- 12・死者の親は出棺を見送らず、葬列に加わることをしない。
- 13・遺族は葬列にはいた履物をはいて帰らない。
- 14・長寿者の箸や餅は長生きする。
- 15・葬式の時は線香は一本づつあげるもの。
- 16・友引の日葬式を出すと連れをよぶというので人形を入れてやる。又葬をだすならば夕暮出棺とする。
- 17・喪家の家族は一年間神様に参るな。

- 18・忌のあかぬうちに家建て屋根ふき修理をしてはらない。
- 19・墓地には木を植えるな。
- 20・湯灌の時の襷や帯はわら縄とする。
- 21・長寿者の葬式の銭籠の銭を拾うと長生きをし福が授かる。

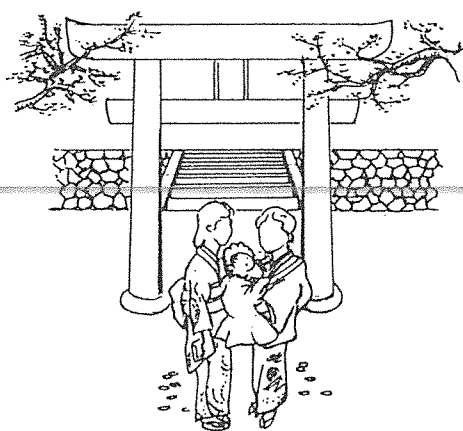


第二部 生育・厄払い・祝い・生活

誕生の前夜

中尾 林 ツタエ

明治、大正、昭和も初期の頃は結婚と云えば父母の定めた人と結婚するのが当り前の時代でした。赤ちゃんが出来た事がわかると無事に出産出来るように子供を守る神様にお参りします。



育児の神様は、観音様、鬼子母神様、吉日をえらんで母や主人妹達と、昔は車もない時代でしたので一〇kmも二〇kmも歩いて祈願に行きました。五ヵ月になると腹帯をしないといけないので、産婆さんの診察に行きました。五ヵ月目の犬の日に腹帯をすると安産出来ることでした。昔の人は、子供は小さく生んで、大きく育てよだから腹帯はいつもしっかりまいておりました。腹帯は実家からお祝いとしていただきました。反物ですから何本も取る事が出来ました。十ヵ月頃になると色々お産の用意を、新聞紙、脱脂綿、サラシ、赤ちゃんのおしめ、産着、ジバン、ゆかたの着古るしたもので毎日毎日おしめ作り産気づくと産婆さんを迎えに行ってもらい来て下さるまで二時間も待たなければなりませんでした。生まれるのは、ほとんど夜の満潮時でした。歩いて下さる産婆さんも大変だったが、待っている産婦も大変でした。無事出産出来るとお七夜の名付けまで赤ちゃんの産湯あびせに来て下さるのでお産婆さんから色々教えてもらいます。お七夜の名付頃にへその緒が取られました。へその緒は小さい桐の箱に入れて大切に取っておくようにと渡されました。昔の名付は簡単で自分がつけた名前を半紙にかいてたたんで一升ますに入れます。半紙は小さくさいたものでお祝いに来ていただいた方にも書いて入れてもら

います。皆がそろった時、神棚にそなえます。祝のおぜんが出来ると、赤ちゃん・お産婆さん・親類の方達の前で名前の入れたますを大麻（おふだ）で良くかきまぜると、初めに、ついて上って来た名前が子供の名前になるという具合でした。

子供が産まれると、となり近所の方がたが、それぞれお祝いに来て下さいます。お重に玉子とか、おとうふ、あげなどもって赤ちゃんを見に来てくれます。昔は何かあると集まってよく面倒をみてくれました。男の子は三〇日で日があくといわれ女の子は三十三日で日があくといわれ神社に、お参りに行っても良いといわれていました。日があくと、お赤飯など作ってお祝いに来ていただいた皆さんに赤ちゃんの名前を書いて配ります。重箱のおかえしにあずき、大豆など少し入れてありました。又、何もない時、半紙とかマッチの子。空で返さないと云うわけでしょうか。又、豆で大きくなるようにとかいっていました。目があくと祈願ほどこに子供と共に観音様にお礼参りに行きます。小さいのぼり、手ふきなど作って持って行きます。神官さまに祈願ほどこをしてもらいま

す。

子供が生まれて百日目が食いぞめといって尾頭付きで白いごはんを炊いて始めてものをたべる祝いもしました。女の子は三月三日、雛の節句で昔は、掛け絵で八段・五段・三段ときれいなお雛様がかいてあります掛軸をいただいたものです。部屋中かけてきれいでした。男の子は鯉幟りで昔は布でなく紙の鯉幟りだったので朝夕出したり入れたりして破れないように大切にしまっておきました。

お誕生日は紅白のお餅をついて重箱に入れます。よそりの中に子供を入れて重箱のお餅を背向わせて歩かせました。赤白のお餅は皆さんに誕生祝いとしてお配りします。

出産

六日町 工藤 ハツ子

私は助産婦をしておりました。

昭和三十年頃までの出産は、現在のように病院でということなく、ほとんどが自宅それも初産ともなれば

実家で出産という習わしとなっていました。

「産婆さん、うちんが腹が痛えち言うちよるかり来てくりやり」とご主人になる人が、ほとんど夜中に自転車で迎えに来るといふ具合でした。私は六日町の警察署近くに住んでいましたが、予定日近くの人があると夜中でもすぐ出かけられるように諸道具・服装など準備していました。それで迎えの人の自転車の荷台にカバンを抱き横乗りし、砂利道をゴトゴト駆けつけていました。

到着してみると、もう妊婦のお腹の痛みは治まり何のこととはなく空振り!! 再びゴトゴト自転車の荷台で帰宅、まだ見ぬ赤ちゃんから翻弄ほんろうされることもしばしばでした。

反対に、息せき切って着いてみると赤ちゃんは既に生まれていて毛布にくるまって元気な産声をあげているということもありました。また、「生まれそうだ、来てくれ」という連絡で迎えの人についていくとそこは田んぼ、野良着のまま近くの作小屋へ移ってもらいそこで出産した人もありました。出産が近づいても仕事をしなければならなかった時代のことです。今では考えられないことで

しょう。

若くて元気な頃でしたので請け合って、高鍋だけでなく川南の通浜・木城までにも行ったものです。

子供が生まれてから七日間位は、赤ちゃんをお風呂に入れるために通いました。出産の折とは違って風呂入れは昼間なので私は自分の自転車でゆっくり行ったものです。着くともうお湯が沸かしてあり、木製のたらいを使って体を洗いました。たらいはお母さんになる人が嫁入りに持って来たのが多かったようです。

七日すると『名付祝』が行われておりました。風呂がすむとお祝いの膳です。ご両親やご家族が考えられた名前を墨書し床の間に貼ってあり上座にうながされ膳につきます。膳には、刺身、煮染め、酢の物、うま煮等がお酒・赤飯と一緒に並べられておりました。また、膳の横にはお礼として品物・お金がそえてありました。いくらいたくというきまりは当時はなくてその家に応じて気持ちをいただいております。それである家では反物、ある家ではお金、野菜をいただいたこともあります。貧しいところでは私の方から後日でよいからお断りした

ものです。

赤ちゃんがすくすく育ち、お母さんも元気に仕事をしていたら、この仕事をしていて良かったと思う私でした。

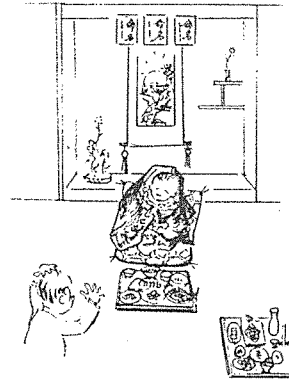
ひな祭

六日町 則松 ヒサノ

ひな祭は私の住んでいる六日町では昔から盛んでした。世の移り変わりにつれて昔と今の祭りにもいろいろと違いが出てきています。

旧暦の三月三日が近づくとひな祭の準備に忙しくなりました。どの家にも古いひな飾りが伝わっており、私が嫁に来た則松（石屋でした）でも五段飾りがあり、古いながらも大切にしまっているのを二月になると箱からだして飾り付けをしたものでした。

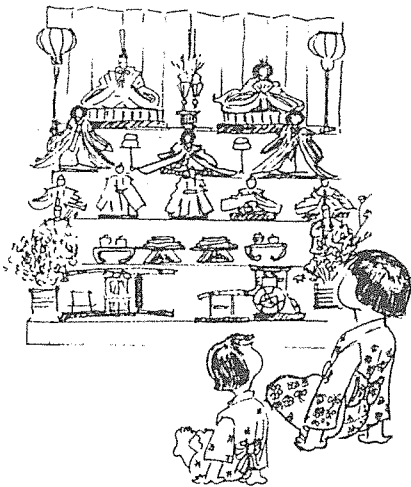
女の子のいない家庭なんて昔の子どもの多い時代は考



えられず、ひな祭は必ず三月にどの家でも行われたものです。

高鍋の町家は半カ畝で東西に長く、六畳位の部屋が横に連なっていますが、この一間に人形を飾り付けます。通路を通ると必らず五段のひな人形が並んでいるのが目にうつったもので、他家のも見せてもらいました。高鍋の民家の特徴といえましょう。

ひな段の下には、小豆めし・煮しめ・甘酒・菱もち・（赤白青）を備えつけの器に盛って供えました。今は買うのがあって便利になりすぐ整えられますが、私の若い



頃（明治・大正・昭和）はそれこそ手づくりが主でした。小豆や麴（こむぎ）は買い求めましたが加工は全て家で行いました。菱もちのよもぎも、田の畔（あぜ）に行つて摘みゆで臼でついたものでした。それゆえ料理はその家独特の味がありました。特に甘酒は「この味は誰さんとこのじゃ」と母が言うのを聞いて驚いたものでした。

前年に女の子が生まれて初節句ともなりますと親戚一同を招いてお祝いをしました。このお祝いは家でやることもありましたが、私の家では「浜下り（はまくだ）」といって蚊口浜へ弁当を持って行き、浜の家を借り切って飲んだり食べたりしたものです。歌も出しました。その度に仕出屋とてない当時のことゆえ、弁当作り方とで花嫁の私はてんでこ舞だったのを覚えています。

またこの「浜下り」の後には、塩水をたんご（桶）に汲んで帰つてお祓（はら）いをする事になっていました。

三月三日の次の日は人形の片付けでした。これを六日町では「やまくやし」といっています。ひな壇のことを「やま」といってそれを取りこわすことをいったのでしょう。人形ひとつひとつ拭いては紙に包んで箱にしま

い込みました。母から「ひな祭がすんで早く片づけないとその娘は嫁の貰い手がない」と言われており、ひな祭りの祝膳や飾り付けの片付けなどで、三月四日・五日は多忙な毎日でありました。

たごし（手興）

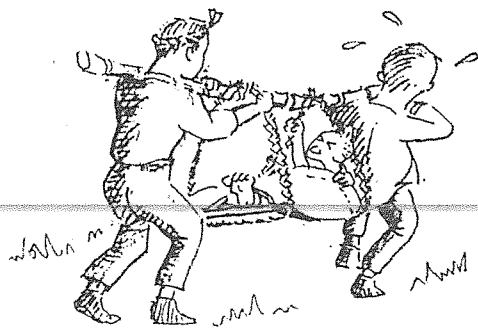
鳴野 森 仲吉

今は病院に行くには車を利用し便利になりましたし、病気が重くならないうちに適切な処置をして貰えます。急病の時は救急車が来てくれます。

また、病気を早く発見していく体制と共済制度が整えられている世の中となりました。そして一病息災・病氣と仲良くつき合い長生きしています。ありがたいことと感謝していることです。

ところが昔は病氣というと全く違っていました。

かぜや腹痛などは、各家庭に配付されている「越中富山の入れ薬」を飲んで治療するといった具合で、軽い病氣のうちは休養やこの程度の薬で治っておりまして。しかし、病氣がこじれてきて動けなくなりどうしても病院



正以前)に幅一・五米程度の農道を、うめいている病人・意識の薄れかけている怪我人を、馬車や大八車でゴトゴトと運ぶには忍びません。

そこで昔から運搬用に考えだされたものが「たごし」です。私は子供の頃「たごし」が通った、○○さんじゃげな」と話し合われているのを見るにつけ、病院から遠い鴨野地区の苦労を痛感したものです。

「たごし」を作るには、雨戸を一枚はずし(戸板といたった)横にします。そして近くのキンチクやば(藪)

へ連れていく必要が出て来た時、また、農作業や山林作業等で事故に遭い我慢した時などは大変でした。町の病院まで重病人を運搬することは当時

としてはいろいろと苦労のあったものです。電話もなく、自転車もなく歩だけの時代(明治・大

からきんちくを伐ってきて縦に割り、二、三本を撚^よって束ねたものを戸板に廻し下げるようにします。これを二個程作り、三米位の担棒を通し上を固定しますが戸板は竹の弾力ではずみ、戸板の上に敷いた布団と共に病人の苦しみを和らげるようになっていました。また病人には毛布等をかぶせ保温にも気をつかったものです。

鴨野から町の病院へ行くには「大明神橋^{デメジシバシ}」から斜めに小丸河原の石ころ道を歩き、舟渡し場から稲荷神社(お稲荷さん)へ舟渡し、再び歩いて病院へと急いだものです。

人が踏み固めた石ころの河原道に行くわけですし、病人は重いしで途中で担い手が交代しなくては続くものではありませんでした。往きはみんな緊張していて何とか耐えていても帰りは提灯^{ちようちん}を頼りにふらふらの状態でした。

今は救急車で五分の所を、昔は二時間かかっていたなんて夢のようですが、「たごし」では実際にそうでした。

商品卸

番野地 猪上 幾太郎

私は大正十年、十日町の久米商店に努めていた。十九才で徴兵検査の前でもあり、若くて元気のいい働き盛りの頃であった。

私は木城・川南・高鍋へ商品を卸して廻る仕事をしていた。当時は今のようにスーパーマーケットはなく、ただ小集落毎に小さな雑貨屋があるだけで、その店に品物の注文を受けては卸していたものだった。

商品は海産物（コンブ

・ワカメなど）味噌・醬

油・塩・煙草・酒類・そ

の他食料品一切であり、

まだトラックは高鍋には

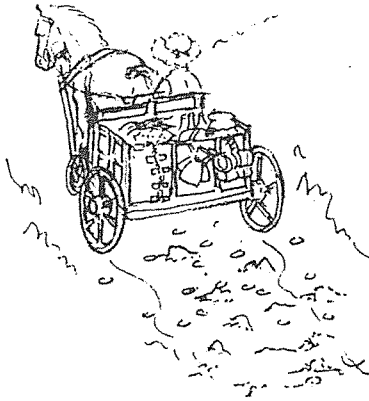
無い頃でこの商品の運搬

は荷馬車を使用していた。

荷馬車というのは、全

長三米程の檜の木製の荷

車（大八車の大きいのと



思えばよい）に枠囲を乗せたものである。車輪は前が小さく、後は大きい鉄製のものでこれを馬に曳かせたので荷馬車といった。私は車の前方の御者台に座って手綱をとっていた。高鍋・川南の道路は当時は狭くて砂利道、ところどころに穴があいているのが普通で、ここを鉄輪（タイヤ式ではない）の振動がゴトゴトと直接伝わるのを我慢しながら廻ったものである。

コースは次の二通りであった。

(一) 店―上江―青木―出店―高城―川原―十文字―

番野地―店

(二) 店―鬼ヶ久保―トロン―塩付―平田―通浜―

染ヶ丘―店

このコースを月に十回程度廻っていた。今では自動車で簡単だが、当時は砂利道を商品一杯の鉄輪の荷馬車なのでスピードは出ず、また品物の注文ものんびりと世間話を交えながらのこととて、朝早く出ても帰りつくのは夜の九時頃といった具合であった。したがって、昼食は、(一)のコースでは高城で(二)のコースでは塩付と定まっていた、それで行きつけの食堂ですませていた。当時日当

として五十銭を貰っていたので昼食代を引いても余裕があり私の貯えとなっていた。

初商

高月 渋谷 ミツヨ

私の実家は、大正時代十日町で食料品店をしていました。私の両親、兄一人、私、妹二人でお客様に朝は早くから夜遅くまで頑張りました。

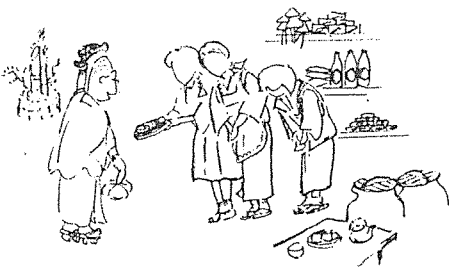
特に正月には、得意にして下さるお客さんをお迎えして「初商」をしてその年のご交誼をお願いしたものです。

この「初商」のために、商家はどこもそうだったと思いますがいろいろと準備に追われたものです。私の家は食料品でしたので、醤油・味噌・いりこ・昆布・佃煮・するめ・罐詰・干物などを年末・正月用として、十二月になると隣の久米商店、岸上商店、遠くは宮崎から多量に卸してもらっていました。

そして暮になると「初商」用として、家族一同で準備しました。値段は平素のままですがどの品も量を多くしました。

「初商」にかける家族の張り切り様はたいしたもので、六人が協力して準備を終わり除夜の鐘を聞くときはほっとしたものでした。いよいよ「初商」の正月二日です。家族一同起床が午前一時、食事の準備、お客さんへのお湯がわかしから始めます。今のように、ガス、電気ですぐお湯がわくわけではなく、当時はカマドに火をつけて薪をくべるものでした。また暖房も電気や灯油・プロパン式ではなく火鉢に炭や煉炭を何カ所か置いて手を温める程度ですが手間がかかり、準備に大変でした。

午前二時になるとお客さんを迎え入れます。寒いのを我慢してお出でになったお客さんに、「おめでとうございます。今年もよろしく願います」と両親が型通りの挨拶を申しますと、私達姉妹はお茶とせんべい（お菓子Ⅱせんべい）を出しました。



お客さんはお茶が済むと、品々を求め精算です。「初商」は現金でしたのでたくさんのお客さんの対応は家族六人でも大変なものでした。

また精算後タオル一本をお渡しする習わしもあり、私たち姉妹三人が声を揃えてお帰りのお客さんにタオルを差し出しお礼を申しました。三人の娘が愛想よく挨拶してくれるのですから、お客さんも悪い気持はなかったと今になって思います。

この混雑が朝の八時頃まで続きました。それからお昼頃までぼつぼつでその間に交代で休みました。

午後三時になると店を閉め、それぞれ後片付けに取りかかり、夕方我が家の「初商」は終了となりました。

矢市（ごんぼ市）

蚊口下 西方文子

昔は、今のように店の数も少なかったもので、蚊口でも暮になると、正月用の品々を持ち寄って、市がたっていました。

市は旧暦の十二月二十日で、光福寺の門前（昔の門）

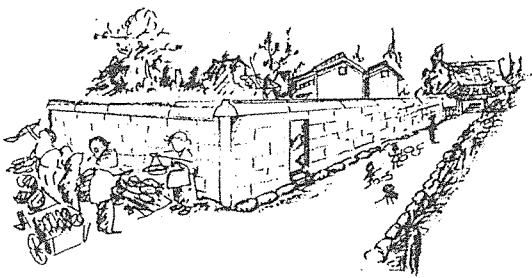
を中心としたあたりに店が開かれました。

矢、人參、牛蒡、餡等があったようです。矢は、その年に生まれた男の子へ二本ずつに買って贈られる風習があったようで、私の家でも、長男の折は頂いたものです。

人參や牛蒡は、佐土原の船野年居あたりからもってこられたということですが、当時は、今のように車のない時代ですから、担いだり、背負ったりして、朝まだ薄暗い内に家を出て来られたのでしょう。

昔は正月料理にどこの家庭でも、酢人參、酢牛蒡をつくられたものですから、奥さん方は、少しでも立派な物をと、朝早くから、買いに来られたものです。

餡は、藪でつくったもので、手の指位の太さで、



長さは十四、五センチ位あったでしょう。他に「たたきわり」という飴もありました。五ミリ位の厚さにして、広く延ばしたもので、金槌等でたたいた割って食べたのでこんな名がついたのでしょうか。

日常はあまり甘い物の食べられない時代、これらの飴は、子供も、大人もおいしく頂いたものです。

今、駅通りの四ッ角に、杉田床屋さんがありますが、昔は茶屋をしておられました。

市に品を持って来られた方々が、帰りに、一杯呑んでゆこうか、又蕎麦の一杯でも食べて帰ろうかと、茶屋に立ち寄られて、あの日ばかりは、大変賑わったものですと、近所の人が話しておられました。

歩き初め

蚊口下 山添 ミサヨ

昔は子供が生まれて、誕生前に歩き出しますと「餅踏み」をさせて祝ったものです。私の家でも、長男重徳が順調に育ち、誕生前に歩きましたので、祝をすることに

しました。前日から餅米を洗ったり、色々の道具を出して準備をしておき、翌日は朝から餅搗きをしました。主人も、長男の歩き初めということで嬉しいのか杵きねを持つ手も、何時よりも軽く振り上げられました。私もそれに合せて手水をとおり、心をこめて、搗き上げました。その時、母が言われるには「餅をよそりに広げて、その上に紙を敷いて、子供をその上にのせて踏ませるもんじゃ」と教えて下さいました。けれども、その行事は致さず、餅を重箱に入れて、風呂敷に包んだものを子供に背負わせて、近い親戚に配ってもらったものでした。今頃あんなことをする家はありませんが、今考えてみると、楽しく懐かしい思いでになります。

※ よそりⅡ取りたての穀物からまざり物を選び分け
るために用いた用具



第三部 年中行事

社日講・いのこ餅

兀の下 前田 重信

兀の下は、高台から見下すとよく分かりますとおり、小丸川に沿って東西に長く形成された集落です。今でこそ小丸川の堤防が築かれ台風時でも安心しておられますが、昔は小丸川の氾濫によってどれ程悩まされたか分かりません。三十数戸（全て農家）が軒下まで浸水し集落あげて転居する話まで持ち上ったこともあります。

このため、集落民の団結心は強いいろんな苦勞を乗り切って参りましたし、喜びを共にする伝統行事も残っています。

その一つに「社日講」というのが兀の下にはあります。あの戦争中でも絶やさずに続けてきたという誇りを持っています。

兀の下の「社日講」は、年に一回春の三月二十二日か二十三日です。寒い冬も終る頃、今年の稲作をはじめいろんな農作物の豊穰と安全を水天宮に祈るものです。

「社日講」が近づきますと、氏子総代によって計画がなされます。毎年のことなのでそうこみ入ったことはなく確認がほとんどで話はトントン拍子にすすみます。そしてこの話し合いの結果は各家庭に触れられ各家では準備にはいります。

ご馳走は持ち寄り制なので主婦は大変です。今ではスーパーマーケットなどへ行けばそれこそ苦勞なく求められますが昔はそうはいきません。芋でいえば、昔は掘ってきて髭を取り洗い、干しておく。こんな手作業がありました。そして煮つけには炭に火をつけ七輪でコトコトと時間をかけたものです。今の主婦の正月を迎えるご苦勞に似ている、いやそれ以上だったといえるでしょう。こんなに手間をかけたものですからどの家のも、畑ボラであってもおいしいものでした。お金で買うものといったら、魚・豆腐・油揚げぐらいでほとんどが家で作った物でした。これを重箱に詰めてほんと一息夕方を待ったものです。

一方中央にある兀の下のお宮の庭にはたくさん薪が氏子によって集められ高く積まれます。一晚中燃やして

も大丈夫な量です。

この周りには子供達が我が家のむしろ、ござ等を敷いて車座を作ります。

いよいよ夕方です。

鐘の音の合図で集まった人々は水天宮さんにお詣りし豊作を祈って座につきます。世話役の挨拶を待ちかねたようにみんな箸を持ちます。兀の下集落の人々が一堂に集い、火を囲み楽しく宴を催す様は何ともいえない光景でした。

子供達は満腹するとお互いに遊び始め、大人は焼酎が



入るにつけ座が変わり声が大きく賑やかになってきます。やがて立って歌う人、火の周りを踊り歩く人にとぎやかさは増し「社日講」は盛り上がっていきました。昔はこんな状態が夜中まで続き、中には飲みあかす人もたくさんいる程でした。

「いのこ餅」の風習も兀の下にはあります。秋の取入れもすんでほっとする十一月、いよいよ冷気を感じる頃、月の第一の亥の日に「いのこ餅」の行事があります。私たちの兀の下集落では四・五軒が単位になってこの日に餅をつき神前に供え宴を開いたものです。

主婦は前日からその準備にとりかかります。各家庭で必要な量のもち米を洗い（一戸で三〜五升位）水に浸しておきます。また、自家製の小豆を煮てつぶし砂糖を加えて「あんこ」を作ります。

さて当日です。この日は農作業を休み当番の家に早めに集まります。そこでもち米を蒸すことから始まります。どの家にも蒸用の釜がありいつでも餅をつくことが出来るようになっており、釜に水を入れ薪に火をつけ「せい

ろ」にもち米を入れて蒸し始めるのは手易いことです。

蒸し上る間男性は臼・杵の準備です。家によって異なりますが石をくり抜いた石臼・赤松をくり抜いた木臼が、杵と共に洗い清められ庭先に置かれますと、子供心にいよいよ始まる餅つきに胸をときめかしたものです。

あの独得な「ペッタン・ペッタン」の音、白い湯気と香り、だんだんねばりをみせ遂には白肌の表われる餅搗きは正月を前にして味わう楽しみでありました。

つきたての餅は、水天宮・会堂・各家の氏神に供え、本年の五穀豊穡に感謝しました。親の後片付けが済むまで子供達には仕事が待っていました。それは親類への「いのこ餅」配りです。祖母や母がつきたての餅を重箱に詰めてどこそこへと指示しますので、それを大事に抱え届けるのでした。貰った家では重箱の中に茶の葉・漬物等を入れてお返しとしたものです。また、お使いにきた子供には「お利口さんじゃね、はい、駄賃」と言っ
て、お菓子やお金を握らせて労をねぎらってもいました。子供心にこの駄賃を貰うのが楽しみで遠くの親類まで歩いて行ったのを覚えています。

雨乞い

兀の下 前田 重信

大正の終り大変な旱魃がおとずれました。六月の田植前から雨が降らず、来る日も来る日も雲ひとつない晴天、「梅雨どきというのに何たること」と、私達農民、そして住民一同天を仰いでため息の毎日でした。

用水路には例年ですと水が流れ、田には牛馬が入っているというのに、溝には水が流れていない有様です。このままでは田植はおぼつかなく、今年の米作は大打撃を受けること必至という状態になりました。

